

氏名(本籍)	なが さき ほう じゆん 長 崎 法 潤 (新潟県)
学位の種類	文学博士
学位記番号	乙第26号
学位授与の日付	昭和61年4月17日
学位授与の要件	学位規程第3条第2項
学位論文題目	(主論文) ジャイナ認識論の研究 (副論文) 仏教とジャイナ教
論文審査委員	(主査) 文学博士 櫻 部 建 教 授 (副査) 文学博士 雲 井 昭 善 名誉教授 (副査) 教 授 福 島 光 哉 (副査) 教 授 箕 浦 恵 了

[論文内容の要約]

本論文は、第一部ジャイナ認識論の基本的性格、第二部『プラマーナ・ミーマーンサー』の研究、第三部『プラマーナ・ミーマーンサー』の解読研究(Pm I, i, 1~153), の三部より成る。

第一部第1章において、筆者はジャイナ認識論が論理学の一分野として初めてとり挙げられた時期を6世紀ごろと見る。すなわちそれは、ウマースヴァティの Tattvārthādhigamasūtra (TAAS) の中で、正知としての五知の前二を間接知 (parokṣa), 後三を直接知覚 (pratyakṣa) と分類したのに始まる。その中、pratyakṣa は感官 (indriya) を介しないで得られる超感官知である。12世紀ヘーマチャンドラの Pramāṇamīmāṃsā (Pm) など後代のジャイナ認識論体系の中では、その pratyakṣa は出世間的な mukhya と世間的な sāmvyavahārika との二つに分けて考えられることになるが、その先行形体を筆者は7~8世紀の後期アーガマに見出だす。ジナバドラ、シッダセーナ・ディヴァーカラ、アカランカなどの直接知覚二分説がそれである。アカランカの説は9世紀のマーニキャ・ナンディンに受け継がれ、それがヘーマチ

ャンドラに至って完成する、と見られる。ヘーマチャンドラによれば、akṣa には jīva と indriya との二義があり、従って、pratyakṣa とはジーヴァすなわちアートマンに依存する知覚であり、またインドリヤすなわち感官に依存して起こる認識である。前者は mukhya であり、後者は sāmvyavahārika である。ニャーヤ学派などでは pratyakṣa といえば一般にまず感官知と考えられるのに対して、ジャイナではむしろ超感官である mukhya の重要性が強調されるところに、古い伝統を承けたこの学派の認識論の独自性がある、と筆者は主張する。

第2章では、ジーヴァの本性とそれを阻害するカルマとその減尽というジャイナ教の基本課題を論じ、mukhya (最勝智)とは、禅定 (dhyāna) と修習 (bhāvanā) によってジーヴァを阻害するカルマを減尽し解脱に到達した者の直接知覚である、と説く。その最勝智に含まれる超直観智 (avadhi) と他心智 (manahpariyāya) とについては、4点を挙げてその相違を論ずるウマースヴァティ、ヘーマチャンドラ説のほかに、両智の相違を認めないシッダセーナ説のごときもあることに注意している。

第3章では、ジャイナの学説とニャーヤおよびヴァィシュェシカのそれとが対比される。ニャーヤ学派では、直接知覚を対象と感官との接触によって生ずる直観であるとするが、ヨーガ行者の yogisamādhi から生ずるアートマンと意との特殊な結合によって、感官にはよらぬ ātmapratyakṣa があることをも認める。この「アートマンの直接知覚」は、しかし、ジャイナに説く解脱智としての出世間的直接知覚に相当すると見るべきかは疑わしい、と筆者は論ずる。ヴァィシュェシカ学派のプラシャスタパーダによれば、直接知覚は一般には感官によって起こる知覚であるが、ヨーガ行者の直接知覚 (yogipratyakṣa) は、ヨーガの実践から生じた dharma によって超感官的に六句義の真相を見るのである、という。しかし、筆者はそれを、高度な直観であっても解脱智とは異質と見るべきものであるとする。後期ニャーヤ学派の説く alaukika-pratyakṣa もジャイナに説く解脱智と性格を異にする、という。

第4章では、『瑜伽師地論』に見える「世間現量」「清浄現量」の説がジャイナの直接知覚論と深い関わりをもつことに注意する。そして、清浄現量とは如実知見としての出世間智であり、それはヨーガ行者の修行体系の中に位置づけられるべきものである、と指摘している。

第5章は、仏教にいう「ヨーガ行者の直接知覚とジャイナに説く完全智 (kevala) との比較検討を、その内容とする。筆者は、ジャイナの「認識手段 (pramāṇa)」論が、古い伝統説から発展して、のちには *pratyakṣa* を *mukhya* と *sāṃvyaavahārika* とに分かつようになるところに、ヨーガ行者の直接知覚を説く仏教からの影響があった、と見る。『瑜伽師地論』にいう「清浄現量」は、ディグナーガ、ダルマキールティら新因明の論師によって「ヨーガ行者の知 (yogi-jñāna)」として説かれたが、そのヨーガ行者の直接知覚とジャイナ認識論にいう出世間的直接知覚との相違点に関連して、仏教の「無分別」の観念に対するアラカンカやヘーマチャンドラの批判を紹介する。

第6章の主題は世間的直接知覚である。まず、ジャイナ学説による認識の構造を概観し、それぞれ実体 (*dravya*) と内的作用 (*bhāva*) とに分けられる五感官と意 (*manas*) とを通じて対象が知覚され、*avagraha* 等の過程を経て、直接知覚が成立することを論ずる。そして、ジーヴァがカルマに阻害されて対象を直接に捉え得ないとき、感官が知覚の手段 (*nimitta*) となってそこに世間的直接知覚が成立することを明かす。

第7章では、ジャイナにおける伝統的認識論で考えられている認識過程と、後代の論理学体系の中に見られるそれとの差違を明かにし、*avagraha* 以前に *darśana* を認めないで *avagraha* を対象の漠然とした知覚であるとする伝統的解釈に対し、アカランカ以後の論理学者らが、*avagraha* に先行する *darśana* を認め *avagraha* を決定知と理解することを説いて、ジャイナでは仏教に説くような無分別の現量を認めず、世間的直接知覚は知を本質とする感官の対象との接触把握である、とする。

第8章では、仏教論理学における認識手段 (*pramāṇa*) が、独自相を対象とする直接知覚と一般相を対象とする推理との二種とされるのに対して、ジャイナ認識論では、正しい認識手段はその条件として対象と認識との斉合性および目的的行為をもつものであるとされることを論ずる。筆者は、アカランカの直接知覚の定義から、ダルマキールティの説く無分別の現量がジャイナの立場からは批判の対象とならざるを得ないことを導き出し、ジャイナの考え方では直接知覚は「直接的で明瞭なもの」でなくてはならないから、言語と結びつかない知覚は知覚と認められない、とする。かくて、ジャイナの認識論では、直接知覚に概念知が含まれる。そして、認識手段の対象は実体 (*dravya*) と様態 (*pariyāya*) とを本質とする実有 (*vastu*) である。独自相と一

般相との二つの対象を立てる仏教では二種の認識手段が対象によって区別されるが、ジャイナにおいてはそのことはない、と指摘して筆者は論を結ぶ。

第二部ではその第二篇第1章35節までで終る未完の書 Pm について、その内容、著作年代と未完の理由、著者ヘーマチャンドラが抱いた Pm 全篇の構想などを、種々な点から検討し考察している。また、他学派の著作からの引用について、可能な限り諸資料を比較精査し、それによって Pm の性格を解明しようと試みている。

第三部は Pm I, i, 1-153 の完訳及び詳しい註より成る。いうまでもなく、第1部・第2部の所論の重要な基礎資料となっている。

#### [審査結果の要旨]

インド認識論史上にジャイナ認識論がどのような位置を占めるか、ジャイナ教の伝統の中でその認識論はどのように体系化されたか、を明らかにしようとしたのが本論文の主要な意図である。筆者はその論旨を展開するに当たって、まず、ジャイナ教において正統な教義学書として認められている TAAS を仔細に検討した。それを踏まえて、次に、その後のジャイナ諸論書の中に認識論体系化の迹を辿り、そして、Pm の綿密な解説研究によって、完成されたジャイナ認識論の相貌を明らかにした。

この試みの中で、筆者は、他の諸学派とくに仏教論理学者ダルマキールティとの関わりに注意しその影響を肯定しつつ、直接知覚を中心としたジャイナ論理学説が諸学派の中で際立った位置を占めていたことをつぎとめた。すなわち、直接知覚について出世間的なそれ (mukhya) と世間的なそれ (sāṃvyaṅvavahārika) とを分ける点や、ジーヴァすなわちアートマンを阻害するカルマ (karman, 業物質) を完全に滅したときに生ずる解脱者の知覚たる完全智 (kevala) が出世間的直接知覚の中心に置かれている点において、ジャイナ認識論体系の独自性を認めたのである。本論文の意図したところはかなり程度に達せられているとあってよい。

筆者の文章はおおむね明快で晦渋がない。論述は平明で説得的である。時に論及の不足や不徹底を感じしめるところはあるが、論理に飛躍はない。ジャイナの論理学説というなお未開拓な部分の多い分野にいでんで、よくその歴史的展開の一側面を明かにしたことは評価すべきである。ことにジャイナ

学説と他学派の説との関係交渉については、従来未知の事実をすくなくならず指摘し、相互の関連を明らかにすると同時に、その相違点にもよく注意して、教えられる所が多い。ただ、筆者はヨーガ行の実践体験を認識論形成の上に重要な意味をもつものとしているのであるから、ジャイナ学説とヨーガ学派との関わりについての検討も必要であったと思われる。また、仏教論理学者による「除分別」「無分別」などの観念を批判するヘーマチャンドラの学説の中で avikalpa, kalpanāpoḍha についてはいまま少しつこんだ分析的考察を庶幾したい感がある。筆者の文献解読の能力はすぐれているが、訳文には多少生硬さが見られまた訳語の不統一も散見される。これらの点はもとより今後の研究によって十分に補われるものと信ずる。

以上により、本論文は文学博士の学位を受けるに値いするものと認められる。

#### [最終試験及び語学試験の結果]

本論文の内容及びそれに関連する事項についての試問、ならびに語学試験の結果、本論文提出者は大谷大学学位規定の定めによって必要とされている学力を有していることが確認された。

以 上